

二月三十一日(日) 午前〇時

翌朝起きてからでは間に合わない黒豆の仕込みを終え、ようやく日元から離れた。甘い匂いがまだ微妙に漂っている。換気扇にはもう少し働いてもらおうか。

基本的には自分が食べる用の、おせちとはとても言えないレベルの代物。この時期限定の、ちよっぴり特別な常備菜と言った方が正しいんだろう。どうしても食べたいものだけ、自分で作る。必要に応じて後は買えば、それでいい。

母が祖母から受け継ぎ、私が母から受け継いだ手書きのレシピを、本棚のいつもの場所に戻した。これも良い加減にデジタル保存しなきゃと思いつながら、スキップしてPDFにするだけの作業を、ついつい先送りしてしまう。また来年、また来年と言いつつながら、このまま時間と共に消えていくような気もする。

最低限の灯りしかつけていない部屋の片隅で、ぼんやりと本棚の暗がりを見て物思いに耽っていると、屋外で雨が降り出した音が聞こえてきた。天気予報では、夜の遅い時間から明け方にかけて降ると言っていた。

雨に合わせて、家の中も少しひんやりしてきた気もする。寝室の灯りを点けに行き、キッチンに戻って換気扇と照明を切った。足元に気をつけながら、自分の部屋へ入る。隣のケビンは、静かによく眠っているらしい。

このままお風呂に入って床に就いても良いんだけど、明日は休みだし、読みかけの本を最後まで読んでから寝ようかしら。読書のお供に、それっぽい音楽でも探そうか。

スリープにしていたパソコンを立ち上げた。動画サイトやプレイリストを開く前に、メールやSNSをチェックする。年末とあって、みんな楽しそうにやっている。タイムラインを眺めていたら、チャットが立ち上がった。

——ママ、起きてる？

私がオンラインになったのを見たらしく、健人がメッセージを送ってきた。

——おはよう、早起きなのね。

——今日なら、ママも起きてると思つて。

向こうは多分、土曜日の朝。一七時間の時差は、中々合いそうで合わない。普段はメールでやり取りするのが精一杯だけど、今日ならほぼリアルタイムでコミュニケーションできる。

——ビデオ通話にしても良い？

お風呂に入っていたら、ノーと答えていた。一応、机上の鏡で確かめると、いつもの顔は保てているように思う。健人は私の答えを待たずに、通話を掛けてきた。私はビデオをオンにして、それに出た。

「元気？」

数年ぶりに見る息子の顔は、だいぶ大人の顔つきになっていた。こつちで生活していた頃より、顔も体も相当しつかりして、母親似だったはずの彼はいつの間にか、父親にそっくりになっている。

「元気よ。そつちは朝から元気いっぱいじゃない」

「まあね。朝の自主トレしてきたところだからさ」

彼は笑いながら、脇に抱えたバスケットボールを指先で回して見せた。彼の背後には、所属するチームのユニフォームが飾られている。

「お父さんはどう？ 元気？」

「お父さんもおばあちゃんも、とつても元気さ」

健人は画面の向こうで、オーバーにリアクションして見せる。その様子に、

「ああ、向こうの子になったんだな」と妙に納得してしまった。

「そつちのパパはどう？」

「まだまだ元気にしてるけど、だんだん歳は取ってきたかな」

私はドアの向こうの愛犬を思い描いた。健人はちよつぴり寂しそうに、「そつちか」と言った。

「来年こそそつちに行つて、また撫でたいな」

「いつでもいらつしやい。お姉ちゃんと一緒に待つてるわ」

お姉ちゃん、のワードに健人は少し嫌そうな顔をした。その様子がおかしくて、私はつい笑ってしまった。

もうすぐ来年。明日一日過ぎたらやってくる来年が、今から楽しみになって

来た。健人と他愛もない話をしながら、どんどん楽しみを募らせていく。

(完)

初出 令和三年一月二十九日 Pivvにて公開